

## 哲学者の直観は素人の直観より信頼できるのか

Comprehension Error の視点から

稲荷森輝一(北海道大学)

本発表では、哲学的直観に対する経験的批判への応答の一つである Expertise Defense を擁護し、哲学者の直観は一般人の直観に比べて信頼性の高いものであることを主張する。

近年、心理学研究の手法を応用して一般人の直観を経験的に調査する、いわゆる実験哲学的研究の進展に伴い、人々の哲学的直観は哲学的真理とは無関連の要因に影響されることが明らかとなっている。具体的には、フレーミング効果や提示順序効果などが代表的である。こうした事実を踏まえ、Weinberg et al. (2001)や Sinnott-Armstrong (2008)など一部の論者は、哲学的直観の信頼性に疑問を投げかけ、直観の使用を批判してきた。

Expertise Defense とは、こうした経験的批判に対する応答の一つであり、Williamson (2007)や Hales (2006)、Ludwig (2007)らによって提唱されている。私たちは、たとえ物理学の素人が行う物理学の実験が信頼性を欠いているからといって、物理学それ自体が信頼できないと考えたりはしないし、法律の素人の判断が信頼できないからといって、プロの法学者の判断までもが信頼できないと考えたりはしない。つまり、多くの領域においては、素人の判断が信頼できないからといって、そのこと自体は専門家の判断が信頼できないと考える理由にはならない。これと同様のことが哲学的直観にも当てはまるとするのが、Expertise Defense の基本的な内容である。つまり、Expertise Defense においては、「専門家の判断に信頼が置かれている領域」と「哲学」とのアナロジーに基づき、たとえ素人の直観が信頼不可能であったとしても、プロの哲学者の直観はなおも信頼可能であることが主張される。

しかしながら、Expertise Defense に対しては多くの批判がある。これらは多くに二種類に分類される。第一の種類の批判は、哲学と他の領域との間のアナロジーは成立しない、というものである。Weinberg et al. (2010) や Ryberg (2013) によれば、専門家の判断に信頼が置かれている他の領域とは異なり、哲学的直観は経験によって信頼性が向上するようには思われえないという。たとえばチェスや数学の場合、素人はどの手が最良であるのか、証明が妥当であるのかといった事柄に関して、曖昧な直観すら抱くことができない。一方、哲学的問題に関しては、たとえばトロッコ問題などを考えてもらえばわかりやすいが、一般人であっても個別事例に対して明瞭な直観を抱くことができる。ゆえに、哲学的直観の産出に哲学的経験が寄与しているとは考え難い。したがって、哲学的経験が哲学的直観の産出に寄与しない以上、プロの哲学者が多くの哲学的経験を有しているからと言って、彼らの直観が一般人のそれに比べて信頼できるという主張は疑わしい。また、ある領域における経験が判断の信頼性を向上させることに寄与するのは、判断の真偽に関するフィードバックがある場合に限られるだろう。チェスや数学の場合、ある判断の真偽は、ゲームの勝敗や証明の結果に照らして評価可能である。しかし哲学の場合、ある直観的判断の真偽に関して、直観から独立した評価基準は存在しないように思われる。この点に鑑みても、哲学における経験がいかんして直観の信頼性を向上させるのかは不明瞭である。

第二の種類の批判は、Mizrahi (2018)が指摘するように、哲学者の直観もまた、哲学的真理と無関係な要因に影響されるという経験的な証拠があるというものだ。事実、Schwizgebel & Cushman

(2012)や Buckwalter & Stich (2013)などの研究は、哲学の専門的教育を受けた人間の直観を調べてもなお、提示順序効果やフレーミング効果が見受けられることを示している。したがって、哲学者の直観は(一般人の直観と異なり)こうした影響から自由であるという主張は、経験的に疑わしい。

これら二種類の批判を踏まえると、Expertise Defense を擁護するためには以下二つの条件が満たされなくてはならないことがわかる。

*Contribution*: 哲学における経験がいかんして哲学的直観の産出に寄与するのかが説明されなくてはならない。

*Immunity*: 哲学における経験がいかんして哲学的直観を無関係な要因の影響から自由にするのかが説明されなくてはならない。

本発表ではこれら二つの要件のうち、主に *Contribution* のほうに焦点を当てる。理由は二つある。第一に、Knobe (2021)など最近の研究で示されているように、直観に影響する諸要因の影響が、哲学的直観の信頼性を棄損するのに十分な程度深刻であるかどうかについては議論の余地がある。第二に、Expertise Defense にとつては、*Contribution* のほうがより重要な要件であると考えられる。なぜなら、専門家の判断が無関連要因に影響をうけること自体は、必ずしも専門家の判断の信頼性を決定的に損なうわけではないからだ。たとえば Danziger et al (2010)によれば、判事が仮釈放を認める割合は、判事の空腹度合いに強く影響されることが示されている。しかし、私たちはこのことをもって、プロの法律家の判断が素人と同程度に信頼できないと考えはしないだろう。なぜなら、彼らの判断が法律に関する専門的知識に基づいていること自体は、なおも事実であるからだ。

では、哲学的トレーニングはいかんして哲学的直観の産出に貢献するのだろうか? 結論としては、哲学における経験は、哲学的事例の理解を可能にし、事例に対する直観を有することを可能にするという点で、哲学的直観の産出に貢献していると考えられる。

本発表ではこの主張に経験的根拠を与えるため、自由意志の実験哲学的研究に着目する。自由意志の実験哲学では、決定論的行為に対する人々の責任帰属直観が調べられてきたが、その中で、実験参加者の多くが決定論的世界の理解に失敗してしまうことが明らかとなってきている (c.f. Nadelhoffer et al. 2021)。このことはまさに、哲学者とは異なり、一般人の多くは決定論を正しく理解することができず、それゆえ決定論的行為に対する直観を抱くことができないことを示している。

このように本発表では、自由意志の実験哲学における最新の研究結果を踏まえつつ、哲学における経験は現に哲学的直観の産出に貢献しており、Expertise Defense に対する批判に対しては十分応答可能であることを主張する。